

万次郎人生の概観②

「北米大陸の土を踏んだ万次郎」

※今回は万次郎が14歳から19歳の頃のエピソードをまとめた。

(1)米大陸に上陸した万次郎

ニューベッドフォードに上陸したホイットフィールド船長は、ジョンハウランド号乗員名簿を港近くの税関に提出、その足で万次郎を伴い、船の事務所になっているジョサイア＝ボニーの所へ万次郎を伴い訪問。ここで船長と万次郎はボニー一家にランチをご馳走になる。ランチを終えて、やっと船長自宅へ。留守を船長の叔母・アメリカが守っていた。船長の夫人は既に亡くなっており、船長は独身となっていた。叔母の手作りの夕食で食事を済ませた。ここでは万次郎の遭難や捕鯨航海の土産話でさぞ盛り上がったことであろう。

今航海終了後に、独身の船長は、かねてから親交があったアルバティーナ・ケイスと結婚する予定だった。式はニューヨークのブルックリンの教会で行われた。万次郎は、結婚式終了まで近隣のエーキンス宅に預けられた。エーキンスは船長と交友のあった実業家である。

(2)ストーンスクール(オックスフォードスクール)で英語を学ぶ万次郎

万次郎は、船長宅から近いストーンスクール(通称「オックスフォードスクール」)に入学し、小学生たちとABCから英語の基礎を学習した。途中、船長はスコンチカットネックに農場と家を購入して婦人と共に引っ越した。万次郎もそこに連れられて行く。学校に通学する合間、広大な農場で農業作業を度々手伝った。ジョンハウランド号から下船して約1年5か月、船長は再び捕鯨に従事するために1844年ウィリアム・アンド・エライザ号に乗船する。残った家族は、夫人と子どものヘンリー、万次郎の三人であった。船長の叔母アメリカが入り婦人や家財を守るようになった。雇用していた農夫もいたので農作業の人手は足りていたが、勉学の傍ら万次郎も農作業を手伝った。船長家族への恩返しの思いも相当強かったと思われる。

(3)船長の万次郎に対する溢れる愛情

ここで船長と万次郎の心温まるエピソードを一つ紹介する。船長は万次郎を毎週日曜日に教会に礼拝に連れて行った。町の名士は一般席ではなく、祭壇の近くに席が構えられていた。船長一家も祭壇の近くにあった。万次郎もその家族席で礼拝を受けていた。しかし、万次郎はモンゴロイドであり、ネグロイドと同等と見なされ、教会側から座らせないようにとの注意があった。

ここで船長の怒りが炸裂する。神の前での人種差別を船長は許すことができなかった。そこで万次郎を快く受け入れてくれるユニテリアン教会に船長は宗派替えをした。一家の宗派まで変更し、船長や一家にとって万次郎はもはや家族であり、愛おしい息子であった。

万次郎の曾孫であり、四代目の中浜博は、愛称の「ジョン・マン」は、単なる愛称ではなく、クリスチャンネームとして使われていたのではないかと推測している。

(4)「バートレット・アカデミー」で航海術等を学ぶ

1844年、万次郎は17歳になっていた。この年、ルイス・バートレットの開設していた私塾「バートレット・アカデミー」の生徒となる。ここで数学や測量術、航海術を2年5か月間ほど修学し、航海士としての基礎を学ぶ。このとき修学した知識が、後の『ボーディッチの航海書』の翻訳につながっている。万次郎が1851年に帰国したときに持っていた書籍の中に1844年版の『ボーディッチの航海書』があった。この書籍は、米国航海書の原典といわれ、近世末の航海士必読の一冊とされた。万次郎は、帰国後の多忙な中を寸暇を惜しんでこの翻訳に取り組み、1856年7月にそれを完了している。



←「バートレット・アカデミー」

中浜博『中濱万次郎—「アメリカ」を初めて伝えた日本人—』
富山房インターナショナル、2005年より転載。

(5)樽屋で年季奉公の万次郎

万次郎は船長夫人に相談し、自立の道を探る。夫人の同意を得て、1845年1月からフェアヘーブンの港の近くにあるハズィーの樽屋に年季奉公に出た。樽屋では住み込みで食事が出たが、十分な栄養のある食事ではなかった。同時期に入った二人の見習も退職したが、万次郎は根気よく仕事を続けた。しかし、身体を壊し、一旦、コンチカットネックの船長宅に戻り療養する。健康を取り戻すと再び樽屋に戻り、年季奉公を終えた。この樽は、恐らく鯨油を貯蔵・保管するための鯨油樽であると推察される。洋樽を作った初めての日本人は間違いなく万次郎であろう。

次号では、万次郎が19歳となり、フランクリン号に乗船して再び捕鯨の旅へ出航する場面からストーリーを再開したい。(次号へ続く)

(参考文献)

- ・中浜博『中濱万次郎—「アメリカ」を初めて伝えた日本人—』富山房インターナショナル、2005年。
- ・川澄哲夫『中濱万次郎集成』小学館、1990年。